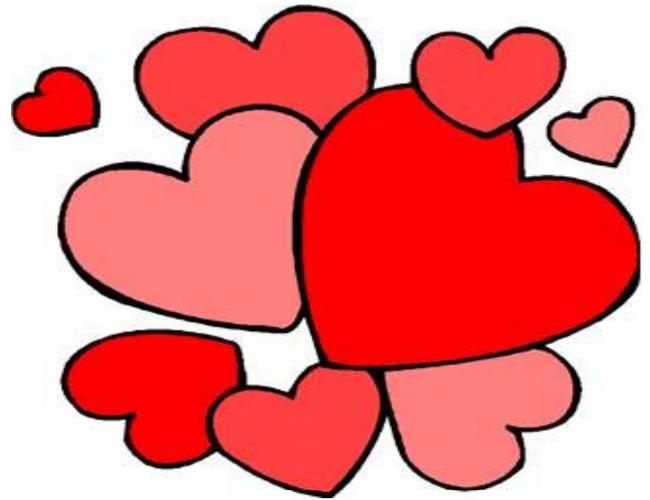


互いを認め合う，望ましい人間関係を育てる道徳の授業の工夫
～道徳的価値を伝え合う活動を通して～



那覇市立城東小学校教諭
比嘉 君代

目次

I	テーマ設定の理由	57
II	研究目標	57
III	研究仮説	58
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	58
V	研究内容	58
	1 望ましい人間関係	
	2 伝え合う活動	
	(1) 伝え合う活動の意義	
	(2) 伝え合う場の工夫	
	(3) 授業展開の工夫	
	①各学年の発達段階	
	②指導内容の重点化	
	3 道徳的価値	
	(1) 道徳的価値の自覚	
	(2) 道徳的価値の集積	
VI	授業実践	62
	授業の計画	
VII	結果と考察	64
VIII	研究成果と課題	69
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献と資料》

「互いを認め合う、望ましい人間関係を育てる道徳の授業の工夫」 ～道徳的価値を伝え合う活動をとおして～

那覇市立城東小学校教諭 比嘉 君代

I 研究テーマ設定の理由

科学技術の進歩が著しいといわれる現代、生活様式や職業、人口動態等の急激な変化によって地域社会の結びつきが乏しく、人間関係の希薄化、規範意識の低下が見られるようになった。遊びあいても同年齢の子がほとんどで小集団であることが多い。社会性を身につける機会が減少しているなか、意図的に望ましい人間関係を築く能力を育む必要があると考える。

今回の指導要領の改訂で、「自己の生き方について考えを深め」という文言が加えられたということから、周りの人々との関わりを通して、自己の日々の生活や考えを振り返り、自己の課題としてとらえながら、よりよい自分・よりよい生き方に向かう姿勢、望ましい人間関係を築く力を育むことの重要性を感じている。より効果的な道徳教育を行う観点から、児童の発達段階や特性を踏まえ、指導内容の重点化も図られており、学習指導要領解説 道徳編（以下、道徳編と略す）によると低学年では、「道徳性の指導や感性に働きかける指導」中学年では、「体験や人間関係の広がりにも考慮した指導」高学年では「相手の立場を理解し、支え合う態度の指導」となっている。社会の一員として、主体的に判断し適切に行動できる人間を育てることが重要視されていると考える。

これまでの自分自身を振り返ると、道徳の学習を指導計画通りこなしながらも、道徳的実践力を育むことに結びついてきたか疑問に思うことがある。

子どもたちは授業の中で、「誰にでも親切にする」「助け合う」等、教師が期待することを言葉にするが、普段の生活では、主張はしても相手を受け入れなかったり、友だちに優しく接しなかったり行動が伴わないことが見られた。授業で学んだことを自分の問題として捉えていなかったからだと考える。つまり、道徳的価値の理解が不十分だったと考える。道徳的価値を理解していなければ道徳的実践力を身につけることはできない。

低学年の自己中心的な発達段階から、自分の思いや考えを伝え合う場において、しっかり相手の話を聞き、それを共感的に受け入れられる態度を育てていきたい。他者とのコミュニケーションがとれること、他の良さを理解することで、互いを尊重し、認め合う意識が育つのではないかと考える。

そこで、道徳的価値に気づかせる授業展開を工夫すると共に、互いのよさを伝え合う活動を取り入れ、相互理解を図りたい。「他の人とのかかわり」の視点を中心とした授業のなかで、「互いの存在を認めあう、思いやりのある子」が育つと考える。

多様な価値への気づきや理解を深め、道徳的価値の自覚を促すことで、望ましい人間関係を築き、学級の子どもたちが「互いの存在を認め合う学級」として過ごせることを目指して本テーマを設定した。

II 研究目標

互いを認め合い、相手を思いやる心を育てるため、それぞれの価値を伝え合う場を設定し、道徳的価値の自覚を促す指導の研究

Ⅲ 研究仮説

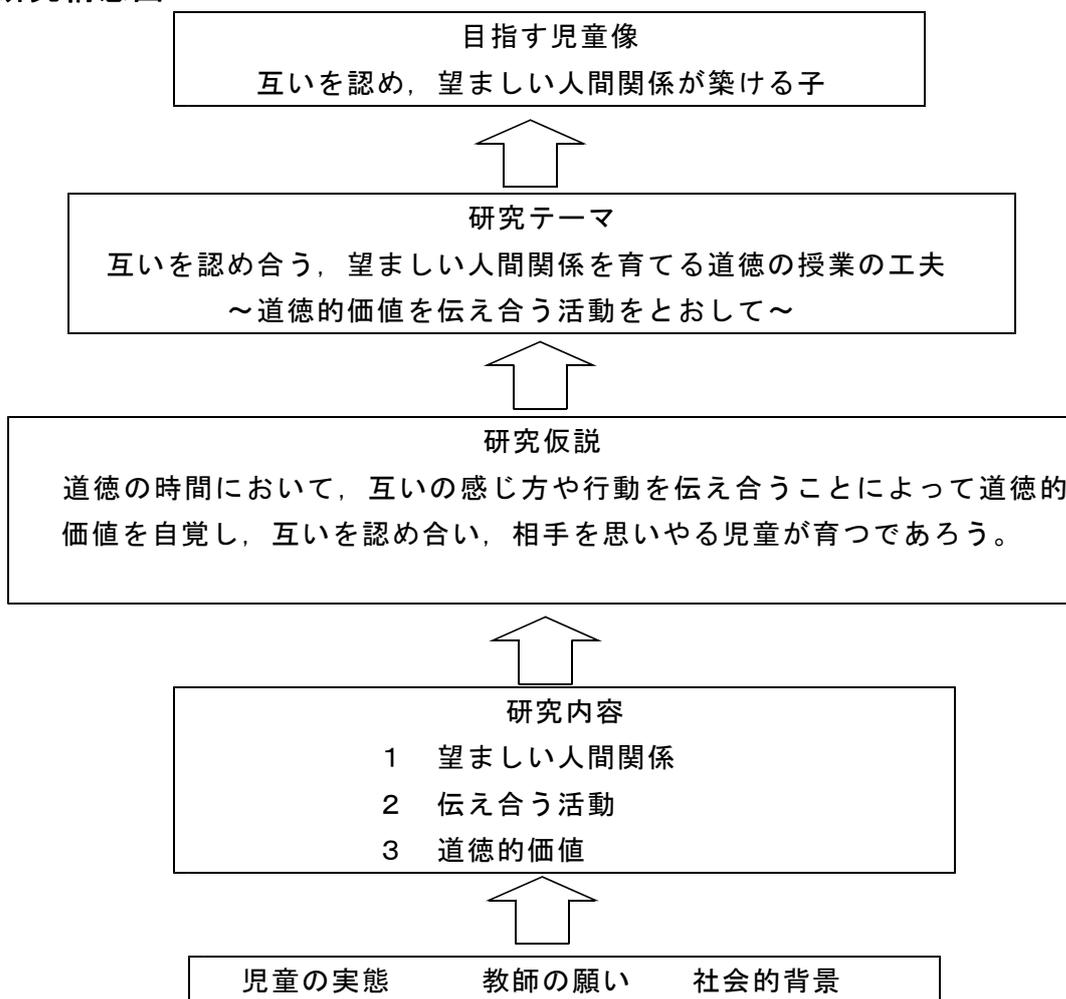
1 基本仮説

道徳の時間において 互いの感じ方や行動を伝え合うことによって、道徳的価値を自覚し、互いを認め合い、相手を思いやる児童が育つであろう。

2 作業仮説

- (1) 自己の価値観を基に、相互理解を図ることで、異なる価値観について知り、自己の価値観を再度見直す活動を促すことができるであろう。
- (2) 自己の価値観を基に、価値の集積を意識した指導計画を作成することにより、互いを認め思いやる気持ちや態度が育つであろう

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 望ましい人間関係

望ましい人間関係とは、互いを認め合うこと、課題を前にした時、集団の一人ひとりが互いに助け合い、高めあいながら解決の方向へ向かえることが望ましい人間関係だと考える。その人間関係を築くためにまず教師と児童の人間関係を築く必要がある。「教師と児童の人間関係においては、教師に対する児童の尊敬と、児童に対する教師の教育的愛情、そして相

互の信頼が基本になる」(道徳編)とあるように、教師は指導者として、また一人の人間として子どもから尊敬される言動と誠意ある態度で接していくことを心がける。次に、児童相互の人間関係づくりとなる。様々な場面で他者との関わりを持たせ、互いに認めあい、助け合える場を設定し、関わる喜びを感じさせたい。自分の心を開き親しく接していこうという態度と心情をもたせ、そうすることで、相手もまた自分に心を開き好意をもってくれる、と実感させたい。

このような、様々な関わりや触れあいを通して、望ましい人間関係を築く能力を身につけさせたいと考える。

2 伝え合う活動

(1) 伝え合う活動の意義

道徳の目標は、道徳性を育てるためである。その道徳性を育てるためには、様々な道徳的価値に出会うことが必要となる。「道徳は、他者とのかかわりにおけるよりよい生き方を求めるものである。」(道徳編)にあるよう、他者との関わりを通し、様々な価値を知ることで、より深く自己をみつめることができると捉える。自己と対話をし、自己を知り、他者との関わりから学び、そして新しい自己を創ることで道徳性は養われる。

道徳性を育むために、互いの価値を伝え合うことは、道徳の授業で重要な役割を果たす中心的な活動だと考える。

(2) 伝え合う場の工夫

道徳性を育むため、新しい価値と出会える場として伝え合う場は重要であると考え。「人間は本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。」(道徳編)から、よりよい自分へとなり得るため、互いの価値を伝え合い、より高い道徳的価値を自覚し集積する場は必要である。そこで、新しい価値と自己の価値を比べ、共通点や相違点に気づき、自己の価値を再構築する活動の場として、伝え合う場は児童の実態やねらいとする価値を考慮し、より効果的になるよう工夫したい。

授業では教師と児童の対話や問答を中心としながら、流れによって方法は異なり、隣りどうし、グループ、学級全体へ、等があげられる。その際、道徳シートに書く、発表する、役割演技を取り入れる等も伝え合う活動を深められると考える。また、座席の配置も考慮したい。

発達段階に応じた伝え合う場での教師の支援の視点について下記にまとめてみた。

低学年	・自己中心的になりがちである。教師との対話で、児童の考えをできるだけ多くひきだすようにしながら、それらの反応を他の児童に返すように教師が関わる。
中学年	・相手の話を聞き入れ、意見の異同を明確にして様々な立場から考え、自分の意見や考えを言うようにさせる。 ・児童の発言がねらいからそれないように調整しながら、児童の発表意欲を大切にす
高学年	・内面的な深い「話し合い」ができるように、集団を育て、自己を見つめると同時に、他を見つめて「話し合い」がすすめられるようにする。 ・内面的に高まっていても、意見として出せない児童もいるので、書く活動を取り入れながら進める。

根岸(2009)

伝え合う場では、誰の話でも最後まで聞く・批判はしない等の普段の学級の雰囲気作りも大切である。話し方や聞き方のルールも確立しておきたい。

今回、伝え合う場をより効果的に進めていくために、書く活動を取り上げる。書く活動については、伝え合う場の活性化を含めて道徳的価値の自覚や集積についてもその効果を期待することができる。「学習ははじめの段階と自分がどう変わったかが分かるような書く活動の工夫、児童が想定したもう一人の自己に問い掛けて考えを深める自己内対話の工夫などが考えられる。」(道徳編)とあるように、教師は子どもが道徳の授業を通して、自分の成長を感じられるような工夫をしなければならない。また「道徳的価値は、単時間で一直線に獲得されるようなものではなく、繰り返されながらスパイラルに高められていくものだろう。(中略)書いたり読んだりする表現活動は、話したり聞いたりする表現活動よりも効果的だろう。」(品川 2002)と述べている。このことから、書く活動の必要性を下記のようにまとめた。

① 自己をみつめ、価値をはっきりさせることができる

漠然ととらえている道徳的価値をできるかぎり明確に意識するために、また、自分より発言力の強い子に左右されないためにも、文章化し整理することが大切である。互いに伝え合う場でも必要になるため、十分な時間を確保したい。また、文章化が苦手な子どものために、予想される価値を選択できるようにし、理由を記述できるようにする。

② 互いの価値を比較することができる

互いの価値を伝え合い、比較するために書く。相手との共通点や相違点をメモするのも書く活動となる。

③ 変容を知ることができる

子どもの道徳性を把握するとともに、机間巡視をしながら指名をし発表を促すこともできる。年間を通して長期的に子どもの変容をみることができる。子どもが以前の自分と比較し、自分なりに成長が実感できる。成長が実感できた喜びが道徳的実践意欲へつながり、実践力となって表れると考える。

④ 家庭との連携に利用することができる

他教科と違い道徳の授業の様子は家庭に伝わりにくい場合がある。活動の様子を伝え連携を図り、効果的に道徳性を育むために必要である。

(3) 授業展開の工夫

① 各学年の発達段階

道徳の授業を行う場合、学級の実態把握はもちろん、発達段階に応じた資料選択も必要だと考える。発達段階における特質と留意点から、手立てを考えてみた。

	特質 金井(1992)	留意点 瀬戸(1992)	教師の手立てとして
低 学 年 対	①権威道徳期 4歳～小学1・2年 善悪の知識・理解はあっても、それは権威者の是認・否認等に基づいている。周囲の模倣や暗示で善悪を識別したりする。動	児童はいつも『自分と先生』の関係であるように対応する。したがって、教師は、児童一人ひとりと対話するつもりで指導しなければ深まりを期待できない。	・子どもの手本となるよう言動に留意しながら、個々の実態に応じたきめ細やかな指導をすること。 ・素直に教師の言葉を受け入れられる時期だからこそ、指導資料の吟味は大切。 ・正邪善悪がはっきりしたものをを使う。 ・相手の立場を理解する力が不十分なので、視覚的

象 児 童	機論的というよりは結果論的判 断が多い。		な手法や動作化・役割演技などを用いて理解を深 める工夫が必要 ・多様な価値を求めるだけの発問はせず二者択一の ようなわかりやすいものを扱うこと。
中 学 年	②仲間道徳期 小学2・3年～4・5年 大人の権威よりは仲間規準・ 仲間規約を重視し、仲間徒党の 是認・否認が行動の善悪の理解 ・判断を左右する。結果論より は動機的判断が多くなり、反省 意識も現れる。	社会生活に必要な社会性 のほとんどがこの時期に形 成される大切な時期だとし、 子どもの個性や個人差に対 応することが必要	・教師も過ちをしてしまう人間だと気づき、時には 批判的な見方をする場合もあるが、未だ素直さの みられる時期なので、自律性を促しつつ個人の気 づきを生かした指導を心がけること。 ・個々の発達の差に充分対応しなければならない
高 学 年	③過度的転換期 小学5・6年 ①と②でみられた傾向からの 離脱と、自主的理解・判断との 混合・移行の改造期である。道 徳的知識・理解や判断力が進み、 自責感も現れて、社会的要求や 自己の価値意識に反する行動に 対して内心の相克や葛藤を感じ、 また、他人の行動や判断に対す る批判も始まる。	児童の自律を助長し、社 会認識の能力を育てるよう にし、民主社会を維持発展 させることのできる能力の 育成に努める必要がある。	・相手の気持ちをくみとり共感し、教師と対等に話 せる時期なので多様な価値を知り葛藤をもたせる こと。 ・葛藤の中で、多様な価値をだすことを中心とした 資料、発問を工夫してもよい。 ・道徳性が急速に発達する時期なので、精神的に不 安定な面があるため、それは考慮する必要がある。

道徳性を育むためには、様々な価値を知る必要がある。発達段階に応じ、伝え合う活動を重ね道徳的価値を集積したい。

② 指導内容の重点化

4月からの子ども様子から、自分に都合の悪い事は聞かないふりをしたり、わがままを言って周りに迷惑をかけた場面がみられた。また、当番活動で、ふざけてトラブルを起こす児童もみられた。実態把握のためのアンケートで、「当番や係の仕事をするときイヤだなと思ったことはありますか」の質問に40%の子どもが「ある」と答えた。理由は「適当にするから」「怠ける人がいるから」等であった。相手のことを考えずに行動してしまうことが原因である。

「みんなと仲良くする」「優しくする」など、周りとの関わり方については、知識として理解していても、具体的にどんな場面でどうすればいいのか、気づかせたいと考えた。そこで、「互いの存在を認め合う、思いやりのある子」を育てるため、道徳の授業を「他の人とのかかわり」の視点から特に「思いやり、友情、信頼」についての資料を中心に授業を計画した。

指 導 計 画	1	①主題名：友達って大切なんだよ ②資料名：「ともだちや」2－（3）友情 ③ねらい：キツネの気持ちに共感させることで、友だちの大切さに気づくことができる
	2	①主題名：わがままはいけないよ ②資料名：「ひとりじめ」2－（2）思いやり ③ねらい：仲良く楽しく生活するには、友だちのことを考え、ゆずりあうことが大切だということを知る
	3 本 時	①主題名：大切なわたしの友だち ②資料名：「モムンとヘーテ」2－（3）友情・信頼 ③ねらい：友だちの優しさに触れることで、友だちと心が通い合う喜びを知る。



互いの存在を認め合う、思いやりのある子

3 道徳的価値

道徳的価値とは、事象に対しての判断基準となるもの、多様な情報、状況、様々なものの関わりの中で、自分がどう判断して（選択して）行動するかの基になるものと考えられる。道徳的価値を基にした自分の判断が、新たな価値と出会い、その価値を自覚し集積することにより、これまでの道徳的価値が自己中心的なものから学級全体へ、そして社会的・公的（個人から→集団へ）なものへと変化していくことが道徳性を育むと考える。

(1) 道徳的価値の自覚

金井(2000)は道徳性を育てるために「道徳教育の充実、指導・支援が求められている今、道徳教育は、児童の行動のみに目を向けて行われるものではない。道徳性（人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性）を育てるものであり、行動面でも望ましい行動のできる児童を育てるのである。」「内容項目は、それをそのまま実践させようとして指導するのではなく、道徳的価値を児童自身の内面に自覚させ、その集積としての道徳性を形成させるように指導するのである。」と述べており、様々な道徳的価値を集積することで、道徳的実践力を育むことにつながると考える。

様々な道徳的価値を子供に気づかせるためには、しっかり自分と向き合い、自己の考え（根拠）を明確にした後、互いの考えを伝え合う活動を通して、共感したり、違いをみつけたりする。その過程で互いの道徳的価値に気づくと考える。

子どもは道徳的価値を自覚し、その価値を集積することで、多様な状況に対応できる道徳性を身につける。道徳的価値を自覚させることは重要だと考える。

(2) 道徳的価値の集積

道徳的価値は人それぞれ異なっている。これまで育った環境や生活様式の違いで価値は様々であり、変化の激しい現代では価値が多様化している。このような状況でよりよい判断基準としての道徳的価値を育てるのは重要である。「子どもが多様な人々との豊かななかかわりの中で健全な心をはぐくまれるように努める必要がある。」（道徳編）とあるよう、多様な価値と出会う場を設けなければならない。多様な価値を知り、その価値のよさに気づいたとき、自己の価値を見直すことができる。そして、次の問題に高い価値で判断し解決できる。そのくり返りで道徳的価値を集積していく。集積された価値は実践力の原動力になると考える。道徳性を育てるためには伝え合う活動を通して、様々な価値に出会い、これまでよりもより高い価値を集積していく必要があると考える。

VI 授業実践

授業の計画

相手を思いやる心を育てるため、「他の人と関わり」に視点をおきながら「思いやり・友情・信頼」等の道徳的価値を集積し、高められるよう下記のように道徳の授業を計画実施した。どの授業でも書く活動を取り入れながら伝え合う場を設けた。

第1時	資料名：「ともだちや」	ねらい：友だちの大切さに気づくことができる	2-(3)
〈授業の流れ〉			
「ともだちや」の読み聞かせ		友だちのいないキツネが、「ともだちや」として商売をしていた。オオカミから「友だちから金をとるのか」と言われたことで、「友だちとは」について子ども達に考えてもらうのがねらい。	
↓			
中心発問 「友だちってなあに」		子ども達から「仲良し」「遊び相手」「大切」「いつも一緒にいる人」と出た。	
↓			
キツネの気持ちになって全員でスキップ		笑顔でスキップ。「最高の気分」という言葉が出る。友だちをつくることができ嬉しいというキツネの気持ちを体感したと考える。	
↓			
まとめ 「友だちって大切な人」		商売（儲け）関係なく、共に過ごし、互いが嬉しくなる関係。漠然だが「友だちって大切な存在だ」という気持ちが持てたと捉え大切な友だちと仲良くするためには、どうすればいいのか、という視点から第2時を計画した。	
↓			

第2時	資料名：「ひとりじめ」	ねらい：仲良く楽しく生活するには、友だちのことを考え、ゆずりあうことが大切だということを知る。	2-(2)
〈授業の流れ〉			
「ひとりじめ」の読み聞かせ		わがままばかりしていると友だちを失うことにクマが気づく。友だちと仲良く楽しく生活するためには、相手を思いやる気持ちの大切さに気づかせるのがねらい。	
↓			
中心発問 クマの思いついたことは何		道徳シートに8割の子どもが「みんなで食べるとなかよくなるね。」「友だちの気持ちを考えよう」と書いていた。	
↓			
「分けて食べる」を動作化		実際にはないリンゴを「分けて食べる」、を動作化。互いに顔を見合わせながら、「せーの」と言って食べる。笑顔になる。	
↓			
まとめ 「楽しいがーばん」		友だちと仲良くするためには、「思いやること」、「ちょっと我慢すること」が必要という価値に気づくきっかけとなったと考えるしかし、ケンカをした時、相手が意地悪をした時はどうすればいいのか、再度、相手を思う気持ちを考えさせるために第3時を計画した。	
↓			

第3時	資料名：「モムンとヘーテ」	本時	ねらい：友だちの優しさに触れることで、友だちと心が通い合う喜びを知る	2-(3)
〈授業の流れ〉				
「モムンとヘーテ」の読み聞かせ		ヘーテに意地悪をされたモムン、翌日ヘーテが謝るが、すぐに許すことができない。そんなモムンを思いやるヘーテの言葉で、改めて友だちの存在のよさに気づかせるのがねらい。		
↓				
補助発問 モムンはなぜ黙っているか		意地悪されたことから、すぐに相手を許すことができない気持ちを共感させることで、自分を振り返らせる。		
↓				
中心発問 「一緒に逃げよう」と言ったモムンの気持ちを考える		子どもから「ケンカするけど、大切な友だちだから助けてあげる」「やさしくする」「ゆるしてあげる」等の反応があった。		
↓				
まとめ 「親友をいっぱい作ろう」		「友だちの意地悪も許そう」という気持ちや、「やはり友だちは大切にしよう」という気持ちが持てた児童がいた。		

VII 結果と考察

【検証1】

自己の価値観を基に、相互理解を図ることで、異なる価値観について知り、自己の価値観を再度見直す活動を促すことができるであろう。

〈異なる価値観に気づき、自己の価値観を見直す〉

【結果1】

「話し合いの時友達の話を知りたいですか」では、授業前「聞きたい」52%「どちらでもいい」48%から、授業後「聞きたい」72%「どちらでもいい」28%になった。(図1) また、「自分の考えと違うけどその考えも良いと思ったことがある」では、授業前「よくある」「ときどきある」が84%であったが、授業後は96%となった。(図2)

図1 話し合いの時友達の話を知りたい 総25名

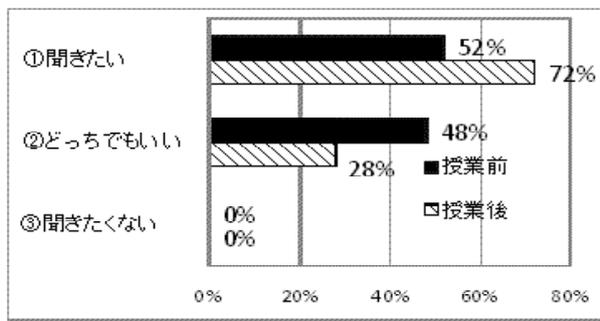
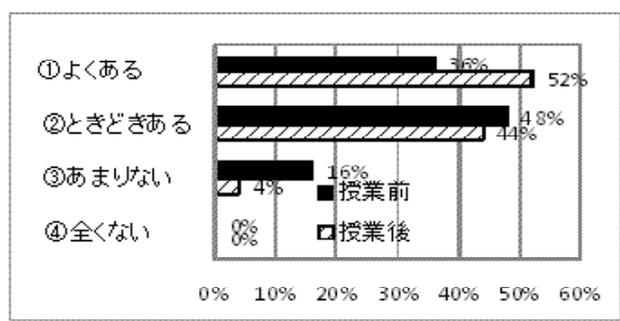


図2 自分の考えと違うがその考えも良いと思った 総25名



相互理解を深めるために、話し合い活動の活性化と、考えを書く活動を重視した。そのため中心発問までの子どもの思考の流れをみとることと、考えを書けるよう時間を十分に確保した。その後互いに発表する場では、机間指導を通して確認した内容をもとに、道徳的価値が高まるよう意図的に指名をした。また、発表を苦手とする子どもにも意図的に指名をし、伝え合う場(発表)へ慣れてもらうことや、それぞれの意見や考えが肯定的に受け入れられるように配慮した。その結果、なかなか書くことができなかった子どもが、道徳シートの裏まで自分の考えた事を書き込んでいる姿も見られた。特に変容がみられた子どもを資料1にまとめた。

資料1 子どもの変容

	授業前	伝え合う活動を通しての様子・変容
C 児	自分の考えを発表することはできるが、友だちの話を見聞かない場合もある。話し合いの場でも、一人遊びがみられた。感想や考えを簡単に書いて済ませてしまうこともあった。	教師の問いに答えながら、授業に集中するようになった。相手を見て話を聞くようになった。対話を通して授業の流れに沿った考えを発表できるようになった。道徳シートからはみ出るほど考えを書くようになった。
D 児	感想や考えを書くことが苦手。話し合いの場では、自分の考えを伝えきれず黙ってしまうこともあった。	自分の気持ちを対話を通して発表できるようになった。授業のまとめの言葉を自分なりの表現で言えた。話し合いでも少しずつ自分の考えが言えるようになった。道徳シートの裏まで考えたことを書き込んでいる姿がみられた。

【考察】

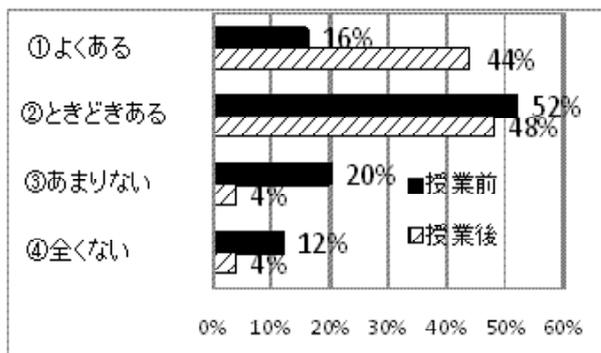
伝え合う場において、書くための時間を設けたことと、互いの考えを肯定的に受け入れる雰囲気づくりを意識したことで、自分の考えを整理し、伝えようとする意識を持って授業に臨むこと

ができたと考える。「友達の話を知りたい」という気持ちが高まったのは、自分も受け入れてもらえる、自分の話も聞いてもらえるという安心感があったからだと捉える。「自分の考えと違うが、その考えもいい」と思えたことから、伝え合う場が自己の価値観を再度見直す場となり、それはまた、日頃の自分の姿を客観的に見直すことに繋がったのではないかと考える。「相手の考えもいい」と認めることができたことは、子どもたちが様々な価値に出会い、そのよさに気づき、自分の考えと違うが、相手を認めていく心情の変化があったからだと考えられることから、相互理解を図るための取組は、自己を見直すことに有効であったと捉えることができる。

【結果 2】

「話し合いの時友達の考えを聞いて自分の考えが変わったことがありますか」では、授業前「よくある」「ときどきある」が68%から、授業後、92%になった。(図 3) また、「友達と相談して考えをまとめるのはいいことだと思いますか」の問いでは、「いいことだと思う」理由として、授業前では「まとめてすぐ答えがだせる」36%で一番多くあげていた。授業後には、「みんなと考えるのはいい、気持ちが伝わる」が40%「ヒントをもらえる」28%という結果であった。

図 3 友達の考えを聞いて自分の考えが変わった 総 25 名



資料 2 「友達と相談して考えをまとめるのはいいことだと思う理由」

	授 業 前	授 業 後
E 児	みんなでやったら勉強が進んでいくから	みんなの考えを聞いたら、自分の考えが変わってもっと勉強になるから。
F 児	答えがわかるから	みんなの答えがわかるしアイディアがもらえるから

授業では、絵本や副読本等、視覚的にも理解しやすい資料を選択した。中心発問の後、子どもが道徳シートに自分の考えを書き発表し、その発表を活かして教師が全体へ問いかけ、全員が思考できるよう配慮した。特に視点をおいたのは、教師が子どもどうしをつなぐ対話を通して、それぞれの考えに共感し、そのよさに気づかせることである。

【考察】

資料 2 の「自分の考えが変わってもっと勉強になる」「アイデアがもらえる」という子どもの声から、互いの考えのよさに気づき、共感できるように子どもの考えをつなぐ授業を工夫したことで、子どもたちは、新しく出会った価値の理解を深めたと考える。子どもは、互いの価値を比べ、新しい価値のよさに気づき「自分もこうありたい」と考えが変わっていったと捉える。それぞれの価値を比較したり、それをまとめたりする、相互理解の場を設定することは、道徳性を育むことに繋がり、望ましい人間関係を築く基礎を培うことになる。しかし、まだ自分の価値をまとめられないために、相手の意見や考えは聞いているが、互いの価値を比較できない子どももいるため、それぞれの考えを伝え合う場を、学校生活のいろいろな場面で工夫する必要がある。

【検証 2】

自己の価値観を基に、価値の集積を意識した指導計画を作成することにより、互いを認め思いやる気持ちや態度が育つであろう。

〈互いを認め、思いやる気持ちを持つ〉

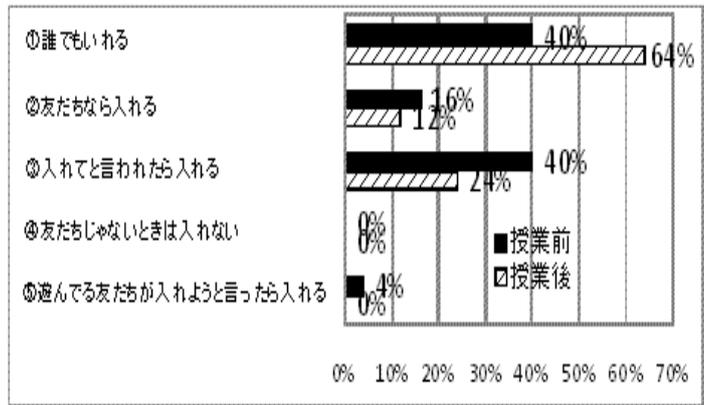
【結果】

「遊んでいる時に後から来た子どもを入れますか」の問いに対して、授業前には「誰でも入れる」と答えた子どもが40%であった。道徳の授業を3回実施した結果、「誰でも入れる」が64%と高くなった。(図4) また、「当番や係の仕事をするとき『いやだな』と思ったことはありませんか」の問いでは、「ある」が40%から16%と減少した。

【考察】

授業前「遊んでいる時に後から来た子どもを入れますか」の問いに対して、「誰でも入れる」が40%で半数もいなかった。また、「友達なら入れる」16%という回答は、相手を選ぶという自己中心的な心情がまだまだ強いことが考えられる。「入れてと言われたら入れる」40%、「遊んでる友達が入れようと言ったら入れる」4%という結果から、遊び仲間に対しては、相手との人間関係で大きく左右される心情があると考えられる。(図4) そこで、道徳の内容項目の4つの視点から、特に「他の人と関わり」について道徳の授業を計画的に行った。

図4 遊んでる時に後から来た子どもを入れますか 総25名



～授業を通して～

(第1時結果)

第1時では、子どもが共感しやすい資料として絵本を選択し、読み聞かせをした。ねらいは「友達の大切さに気づくことができる」とし、資料の大まかな流れを確認した。

今回の授業における子どもの心情の変化を、子どもの声を取り上げて表にまとめた。

第1時における道徳的価値への気づき 題材「ともだちや」

		発問	子どもの声
道徳的価値	低(始)	「ともだちや」(商売)としてのツネの心情	
		①「ともだちや」としてお駄賃もらったツネの気持ちはどうでしょう	<ul style="list-style-type: none"> ・お駄賃もらって嬉しい ・暗い感じ ・お駄賃もらったけど、お腹痛いから微妙な感じ ・お駄賃もらったけど、なにか寂しい
		②中心発問 材かみから「本当の友だちか」と問われてツネはどう思ったのでしょうか	<ul style="list-style-type: none"> ・お駄賃もらえなくてがっかり ・「ともだちや」だからお金とるんだよ ・材かみ怖い ・材かみをみてびっくり ・友達からお金とらないの？ ・友達(なら)嬉しいな ●友達はお金で買うものではない ・友達は心でつながっている
	高(終)	対等な関係、共に過ごすことが楽しく、嬉しいなという心情	

【考察】

初めキツネの心情を「商売」として見ていたが、「友達はお金で買うものではない」と友達に対する価値を問い直している。その後道德シートでは、「本当の友達からお駄賃はとらないよね。オオカミさんありがとう。」等の内容が多く、ねらいとする価値・心でつながった関係について気づきはじめたと捉える。しかし、お駄賃をもらえなかったことに「え、何でだよ。ちゃんと遊んであげたのに。」と書いた子どももいた。子どもの発表内容への価値づけや、個々への細かい配慮が必要だと考える。

(第2時結果)

第2時では、子どもの実態に近い内容で、視覚的にも心情の変化が捉えやすい絵本資料を選んだ。読み聞かせでは、クマの気持ちに気づけるよう中心となる場面をくり返し読んだ。「友達のことを考え、ゆずりあうことが大切だということを知る」をねらいとし、クマが、「友達と楽しく過ごすには相手を思うことが大切だ」と自らの行動を振り返る場面を中心とした。

第2時における道德的価値への気づき 題材「ひとりじめ」

		発問	子どもの声
道 徳 的 価 値	低(始)		友達と一緒に過ごせればいいという心情
		①こぐまはなぜ「楽しくない」「おもしろくない」「おいしくない」と言ったのでしょうか	<ul style="list-style-type: none"> ・一人だから ・友達いないから ・皆いないから ・友達どうやってつくろうかな、声かければいだろう。それやろう、そしたらきてくれるかな ・そうか、みんなで食べたらいいんだ。だったら僕たちも全員で食べよう ・一人で食べたから、みんなと食べよう。みんなのを食べたから(いけなかった) ・ひとりじめしないで、みんなで楽しく遊んだり、食べたりしよう
	②中心発問	こぐまは何をおもいついたのでしょうか	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと一緒に食べたらいい ・わがままはダメ ●ひとりじめをしたからおいしくないし、仲良く遊べない ・ひとりじめしないようにしよう ・最初からそうすればよかった(分けてあげる、ゆずってあげる等) ・皆と分けて食べればいい ●自分だけが『楽しい』ではいけない ・相手の気持ちを考えて行動したい
	高(終)		相手のことを考え、ゆずりあうことが大切だという心情

【考察】

中心発問の後「ひとりじめをしたからおいしくないし、仲良く遊べない。」という言葉がでた。それは、「自分の欲が満たされても、嬉しくない」と、相手の気持ちを考えはじめたことに繋がったと捉える。道德シートを見ると「自分のリンゴが減っても、皆と分けてたべるのが楽しい」「相手の気持ちを考える」と価値は変化していた。第2時では、大切な友達との関わり方を理解しはじめたと考える。「自分だけが『楽しい』ではいけない」という発言からもねらいとする価値

値に近づけたと考える。また、考えがまとまらない子どもに「友達の話を聞いてみようか」と声をかけたところ、友達の考えを聞いた後、自分の考えをまとめることができる子どもが増えていった。

(第3時結果)

第3時では、絵本は使わず、資料の読み聞かせだけにした。子ども達も聞くことでイメージできるようになったことと、絵にとらわれず、必要な場面で深く考えさせたいと考えた。「ケンカをした時、意地悪をされた時でも友達を思いやる気持ち、友達を許そうという気持ち」をねらいとし、「どんな友達関係がいいのか」について伝え合った。中心発問の後「ヘーテは悪いけど、やっぱり一人にさせられなかった。」と「謝る相手の気持ちや友達を許す気持ち」に気づいた子どもの発表から、道徳シートに「意地悪をされたけど、許そう」「親友になる」等が書かれてあった。

第3時における道徳的価値への気づき 題材「モムンとヘーテ」

		発問	子どもの声
道徳的価値	低(始)		
		<p>①「君は逃げたらいいよ」と言われ黙っていたモムンは何を考えていたのかな</p> <p>②(中心発問) 二人はこれからどんな友達になっ たらいいのかな</p>	<p>相手が意地悪をしたんだから、許せないという心情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怒ってる ・イライラしてる ・荷物すてようか ・自分だけ逃げようか、迷ってる ・一番いい友達 ・二度と昨日みたいな悪い事をしてほしくない ・やり返さない ・悪口言わない <p>●ヘーテは悪いけど、やっぱり一人にさせられなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意地悪されたけど、荷物をすてて一緒に逃げる。大切な友達だから ・ケンカをしても、仲直りして、また一緒に遊んだり食べ物分けたりする、大親友 ・前は親友ではなかったけど、後は親友になった。 ・友達を許す気持ちを持っておこう <p>●怒ってばかりはダメ、友だちを許そう</p>
	高(終)		
		ケンカをしても友達を思いやり、許そうとする心情	

【考察】

子どもたちは、黙るモムンの気持ちを考えながら、相手を許せない気持ち・許そうとする気持ちで揺れ動く心情に気づけたと考える。友達関係や人としての生き方を考えることで、「怒ってばかりはダメ、友達を許そう」という子どもの声が、気持ちの変化として表れたものだと考える。それは、「怒り」よりも「友達を大切に思う気持ち」が高まり、相手を思う気持ちを深めることに繋がったと考える。

資料3 B児の変容

	第1時	第2時	第3時
内容	お駄賃をもらえなかったからがっかりした	友達と一緒に食べたり遊んだりすると楽しい、独りじめはダメ、友達の気持ちを考えよう	意地悪されても友達だから許す。悪かったところもあるけど一人にできない。ヘーテも心をこめて謝ってる。
教師の解釈	友だちの大切さには、気づいていない	相手を思いやる気持ちに気づいた。	意地悪されても許す気持ちと、悪いことをして謝る気持ちの両方に気づいた。

【考察】

3回の授業を通して、その都度道德シートに自分の考えを書き、互いの価値を伝え合う活動を取り入れたことで「友達」に対する意識が、自分にとって都合のいい関係から、互いに認め合える、クラスの一員「仲間」として意識できる「友達」へと変化していったことが分かる。

「他の人との関わり」の視点から、特に「友情」についての授業を重ね、子どもが友達との関わり方について具体的にイメージできる資料を選択したことで、相手を思いやる心情を培うことに繋がったと考える。それは、やや自己中心的な言動が見られたB児の道德シートの変容からも捉えることができる。

「お駄賃をもらえなかったからがっかり」→「友達の気持ちを考えよう」→「悪かったところもあるけど一人にできない」（資料3）授業を通して、自分のことだけでなく、相手のことも考えることで共に楽しくなれる、という道徳的心情に繋がったと考えることができる。また、図5より、「当番や係の仕事をするとき『いやだな』と思うこと」が40%から16%に減ったことから、相手を思いやる気持ちが育ちつつあると捉えることができる。

以上より「互いの存在を認め合う、思いやりのある子」を目指すために、道徳の授業を重点的、計画的に行うことで、ねらいとする価値を集積することにつながり、これまで「仲良くする」という日常安易に使用していた言葉を心情面を通して、心に受け止めさせることができたのではないかと考える。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 相互理解を図るために伝え合う場を重視し、様々な価値観との出会いと、自己の価値観を再度見直す活動に取り組むことは、道徳性を育てることに繋がった。
- (2) 指導計画において、学習内容を「思いやり、友情、信頼」に重点化したことで、道徳的価値が集積され相手を思いやろうとする心情が育った。

2 課題

- (1) 伝え合う場で、一人ひとりの子どもの発言を全体へ広げる工夫をする
- (2) 子どもをつぶやきを瞬時に拾い、ねらいへ導く構成力を身につける
- (3) 発言が少ない児童への手立てを工夫する

参考文献

- 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 文部科学省 2008
- 『道徳的実践力を高める 道徳授業の改善ポイント』 岩上薫編 (株)教育開発研究所 2009
- 『道徳授業の改革「価値の明確化」で生きる力を育てる』 諸富 祥彦著 明治図書 1997
- 『明るく楽しい構造化方式の道徳授業 小学校・低学年編』 金井 肇著編 明治図書 2000

図5 当番や係の仕事をするとき「いやだな」
と思ったことはありますか 総25名

